

異端の医学者、ピエール・マビーユ： 「人間の科学」から「全体論的人間学」へ

有馬 麻理亜

はじめに：「シュルレアリスムの同伴者」を超えて

1930年代半ばからシュルレアリスムに関わりをもち、数々の評論や書籍を発表した医師ピエール・マビーユは、シュルレアリスムの主要メンバーとしてよりも、挿話的な人物として紹介されてきた。シュニウ＝ジャンドロンはマビーユを「グループのメンバーというよりもむしろブルトンの友人」と評しており¹、現時点でマビーユに関する唯一の博士論文を書いたレミー・ラヴィエユもまた、その題を『ピエール・マビーユ：シュルレアリスムの同伴者 (compagnon)』としている²。シュルレアリスム研究において、マビーユは古今東西の民間伝承や聖典、詩や物語を独自の視点で集めた、奇妙なアンソロジー『驚異の鏡』(1940)の著者としての印象が強い。彼の民間伝承、オカルト、占星術、秘教に関する膨大な知識はまた、40年代以降、ブルトンが秘教への関心を明確に見せ始める傾向と共鳴しあっているため、この文脈で紹介されることがほとんどだ。他方、マビーユは『人間の構成 La construction de l'homme』(1936)、『リジューのテレーズ Thérèse de Lisieux』(1937)、『エグレゴールあるいは諸文明の生 Égrégoire ou la vie des civilisations』(1938) (以下『エグレゴール』)、『人間学入門 Initiation à la connaissance de l'homme』(1949)といった作品を発表し、独自の人間学や文明論を発表している。鈴木雅雄は「彼の思想の骨格をなすキー・ワードの中から『驚異的なもの』と『エグレゴール』という二つを選んでおけば、とりあえずマビーユの思想を見渡すことができるように思う」と述べ、マビーユの思想に見られる決定論者的性格によって「偶然と必然の絶えざるシーソー・ゲームの中で、シュルレアリスムは自らを豊かなものにしてきたが、マビーユの立場は片方の端にだけ比重のかかった、いささか単純なヴァージョンの一つであった」と評価している³。この評価が正しいとしても、マビーユの思想は多くの場合、このようにシュルレアリスムとの比較対照によって論じられてきたのである。

マビーユ自身はどのような気持ちでシュルレアリスムと向き合っていたのか。1941年12月26日、友人のウォルフガング・パーレンに宛てて書いた手紙のなかで、彼はこのように告白している。

〔…〕 私がブルトンと彼の友人の芸術的な努力に対して関心を持つのは、一つには、

私がブルトンに対して抱く個人的な友情によるもので、もう一つは、ブルトンの努力における本質的な原則を支持するからです。その原則とは、個人の無意識と集団の無意識についてさらなる調査を行う手段を採求すること、〔…〕巨大な時代遅れの美を捨て去ることであり、また、原始芸術、素朴芸術、あるいは野生の芸術といったものに近づこうとする欲望や、弁証法批判のほかにも、唯物論、生物学、精神分析などが少しずつ作り上げてきた武器をこの採求において用いようとする意思なのです。〔…〕私に関して言えば、もっとも大切なことは、アカデミックな科学によって否定され、いかさま師によって悪用された分野に、知、すなわち人間とコスモスの諸関係を導き入れることなのです。[Laville 1983 : 18-19 et 80]（下線は引用者）

先行研究が指摘するように、マビエユをシュルレアリスムに繋ぎとめたのはたしかに友情という個人的な感情であったが、シュルレアリスムが扱う主題やブルトンの探究における「原則」に賛同していたことも重要であった。マビエユは人間と宇宙の関係に潜む謎を解明するという彼独自の探究を進めており、この探究にはシュルレアリスムが採用した分析方法（無意識、原始芸術、弁証法批判、唯物論など）が有効だと考えているからだ。またマビエユがアカデミックな科学ではなく、オカルト、秘教や占星術といった異端の学問を重視していることは、先行研究が取り上げるマビエユ思想の特徴を裏付けている。ただし、探究方法の「武器」として、マビエユが「生物学 science biologique」を挙げていることを忘れてはならない。そもそもマビエユには第二次世界大戦を生きた医学研究者という別の顔があるのだ⁴。

筆者はブルトン研究やシュルレアリスム研究を通じてマビエユの重要さに気づき、彼に関心を抱くようになったが⁵、マビエユに関する調査を進めるうちに、シュルレアリスムという視点からマビエユを評価するのではなく、彼を第二次世界大戦時に活躍した一人の科学者として知の歴史に位置付ける価値があるのではないかと考えた。先に挙げたマビエユの主要作品（『人間の構成』、『リジューのテレーズ』、『エグレゴール』、『人間学入門』）は、彼の科学研究の成果が強く反映されており、作品が互いに足りない部分を補い合い、巨大な世界観を構成しているように見えるからだ。そしてマビエユが生涯示し続けた異端の科学、すなわち反文明と呼びうるカウンターカルチャーへの関心と、彼の科学的研究はいかにして両立しえたのか、また彼が参照する科学的知識は当時の科学の潮流においてどのような位置付けにあったのか、他にも彼のように一見両立しづらい科学とカウンターカルチャーに関心を持っていた科学者がいたのか知りたいと思った。このような問いに答えることは、最終的に第二次世界大戦前後における科学と反文明的思考の関係を明らかにする契機にもなりうる。

そこで本稿は、マビーユの科学的な関心が当時の知の歴史にどう関わっているのを見つけていき、彼の作品群を一つの世界観として分析するための科学的視点を見出すことを主要な目的とする。具体的には、マビーユが最初に発表した『人間の構成』（1936）という作品が当時の人間学ブームと呼びうる現象と無関係ではないことに着目し、まずはそのブームの火付け役となったアレクシス・カレルとの関係を探る。そのうえで、マビーユの科学者としての活動や交流関係から彼がどのような科学的知識を基盤としているのかを明らかにしたい。

1. 時代背景：『人間、この未知なるもの』（1935）という現象

『人間の構成』（1936）が出版される一年前、ある書籍が世界中でベストセラーとなっていた。序文の最後にマビーユ自身もこの現象について言及している。

私は 1935 年 6 月にはすでに本書の執筆を終えていました。この書は私の何年もの研究内容を総括するものです。この日付 [= 1935 年 6 月] 以降にアレクシス・カレルは『人間、この未知なるもの』を出版しました。全体を通じて、読者のみなさんはカレルの理論に対する一つの返事を本書に見出すでしょう。カレルが得た成功は私にとって大きな意味を持っています。この成功は現在、人間の精神がこの種の問題を気にかけているということを示しています。この種のあらゆる関心事のうち、人間とはまさに何なのか、この世界において人間の価値とはどのようなものか、人は知りたがっています。この点に関して、知の統合が熱烈に期待されているのです。私は『人間の構成』がこの知の統合に貢献することを願っています⁶。

アレクシス・カレルの『人間、この未知なるもの』は 1935 年 9 月に合衆国とフランスで同時に出版され、約 20 ヶ国語に翻訳されたベストセラーである⁷。カレルはリヨン生まれの医師であったが、ある事件によって事実上フランスに居られなくなる。それが 1902 年の「ルルドの奇跡」事件である。ルルドの巡礼に同行し、結核腹膜炎を患っていたマリー・フェランが治癒するのを目撃したカレルは報告書を提出した。それを新聞『ヌヴェリスト』（1902 年 6 月 3 日、6 日）が「ルルドの奇跡」として取り上げたことで裏目が出る。カレルは聖職主義者から奇跡を認めない点において弁解を求められ、反聖職主義者で唯物論者が多かった周囲の医学者からはルルドに行っただけに、奇跡を否定しないことについて弁解を求められた。しかしカレルはいずれの非難に対しても曖昧な態度を貫き、双方を敵にまわしてしまう [Drouard 1992 : 39]⁸。こうして行き場を失ったカレルは海外に出た。活動の場を求めてカナダ、シカゴと移動し、最終的にニューヨークのロックフェ

ラー医学研究所に身を落ち着ける。その後、1912年、シカゴ時代の臓器移植の研究によりノーベル医学賞を受賞し、自分を追い出したフランスの医学界に対する雪辱を果たした。『人間、この未知なるもの』はこのような背景のもと成功をおさめたのである。その後カレルは1938年にロックフェラー医学研究所を定年で辞し、翌年にフランスに帰国する。1941年にはヴィシー政権のフィリップ・ペタン元帥の許可のもと、以前からあためていた研究を行うための「人間問題研究所財団」を設立したが、多くの問題があり、3年後閉鎖され、彼もその後すぐに亡くなった。

作品の概要についてもふれておく⁹。この作品のライトモチーフは、科学や産業の発展にともなう文明への危機感である。文明が発展し、食事や教育、住居、交通といった生活様式が便利になっても、道徳的・知的レベルが低下したとカレルは嘆き、その原因を科学のあり方だとする。つまり科学が人間のためではなく、それ自身のために発展したこと、細分化された科学が調和のない状態で発展したことが問題だというのだ。そこでカレルは人間にとって良い環境を目指すためには、人間を基準とした科学、細分化された学問の統合である「人間の科学 la science de l'homme」が必要だと主張する [HC, 75]。このような前提のもと、カレルは生理学・解剖学・教育学・心理学・分類学はもちろん、フロイトの精神分析や奇跡や祈り、テレパシーといった神秘主義的な内容にいたるまで、あらゆる種類の分野を横断しながら、人間の肉体や精神、人間の内的・外的な時間、適応、個人といったテーマを論じていく。その語り口は比較的堅苦しくない、大衆向けの通俗科学的なものである。

しかし、現在ではこの本のもう一つの主題の方がよく知られているかもしれない。それはカレルの優生学的差別思想である。「人間の再構築 (reconstitution)」と題される最終章には、そこにいたるまでの伏線としてカレルが散りばめていた民主主義的平等に対する嫌悪や、フェミニズムに対する批判、優生学的断種の奨励といった主題が収斂している。なかでも有名なものは、社会階級から「生物学的階級 classes biologiques」 [HC, 351] への移行、いわゆるビオクラシー (biocratie) の提唱だ。この作品の冒頭から最後まで、カレルは犯罪者や精神病患者、性病患者などに対して、彼らが科学の発展が生み出した害、あるいは公衆衛生上の問題であるといったイメージを繰り返し与えている。作品の最後に近づくと、科学の発展や民主主義的平等は多くの「劣った人間」を助けてしまったが、このような人間の増加が有害だと述べるにいたる [HC, 348]。この歪んだ危機感から、彼は高度な潜在的能力を持つ子どもたちを墮落した親から引き離し、完全に育て上げることで、「遺伝性ではない特権階級」 [HC, 349] である生物学的階級へ移行することが必要であると指摘したのである。さらにカレルは犯罪者と精神病患者を収容するために多くの金が使われていることを金の無駄だと大衆の怒りを煽り、「もっと経済的なやり方」として、刑

務所を廃止し、軽微な犯罪者には病院で鞭や科学的な手段を用いて秩序を保つことができると主張し [HC, 371]、そして重大な犯罪者や精神病患者については、別の解決策を提案した。

殺人を犯したり、子どもを誘拐したり、武器を手にして盗みを働いたり、公衆の信頼を酷く裏切った者には、適切な毒ガスを備えた安楽死施設があれば、彼らを人間的にかつ経済的に処分することができるだろう。同じ処置が犯罪行為を犯した精神病患者にも適応可能ではないだろうか。健康な個人を基準にして現代社会に秩序を与えることを躊躇ってはならない。[HC, 371-372]

現在ではこの引用がナチスのガス室を連想させることは明らかだ。そのため先行研究ではカレルがナチスの思想の先駆者である、あるいは対独協力者であるという批判に基づいた政治的性格の強い研究や、カレルの優生学的思想を客観的に優生学の歴史に位置付ける試み、カレルのこの過激な言動と彼が行った研究所での活動との比較を扱った研究などがある。本稿では主題からそれてしまうため、カレルの理論の是非には立ち入らず、当時の人々がなぜこれほどこの作品に関心を抱いたのかを考えたい¹⁰。現代の私たちからは想像し難くとも、マビーユも指摘するように、この作品は時代の現象だったのだ。ドルアールは当時の反響（好意的・反感・ためらいなど）を詳細に紹介しているが、その反感やためらいは、いわゆる「ガス室」を想像させる文脈に対してというよりも、科学者であるカレルが祈りやテレパシー、奇跡といった神秘主義と科学を同じ土俵で扱ったことに対する科学者たちの違和感や、優生学的断種を勧めたことに対するカトリックの批判に基づくものが多い [Drouard 1992 : 109-128]。好意的に捉えた者たちはどうか。あらゆる階層がカレルの作品に自分たちの見たいものを見出していたようだ。すなわち大衆はカレルが世襲ではなく「能力主義 *méritocratie*」を提唱したことに共感を持ち、左派は、資本主義の破綻を表明するという、カレルの反リベラリズム的態度を好意的に受け入れ、右翼はカレルの議会民主主義批判を賞賛したのである [Drouard 1992 : 119-120]。しかもノーベル賞受賞者というお墨付きまでである。ドルアールが説明するとおりだ。

カレルの作品を成功に導いた展開はおおむねシンプルだ。あらゆる社会的集団のカテゴリーがカレルの発言のなかに自分たちを再発見し、そこに自分たちの考えやイデオロギーの正当性の弁明や確証をみたのだ。一言で言えば、これらの人々は自分自身に「ほら、学者が、ノーベル賞受賞者が、わたしたちと同じように考えている。私たちは正しいのだ」と言ったのだ。[Drouard 1992 : 113]

この本はノーベル賞科学者としての権威でもって、科学的知識を動員し、産業の発展によってもたらされた様々な社会問題に対する人々の不満を救い上げることに成功した。カレルは作品を通じて犯罪者、性病、肺病、精神病者が社会衛生上の害悪だと繰り返し、読者の恐怖や不安を煽った。その一方で、カレルは無能な富裕層を批判し、世襲によらない新たなエリート集団を再構成すると提案した。特権を持つ者に見える富裕層や支配者階級に対するカレルの批判は、読者の不満や嫉妬を解消させる効果があっただろう。また「能力主義」という言葉は、共和主義的教育を受けた大衆に希望を与えたかもしれない。実際、よく読めばカレルの「生物学階級」は遺伝的な要素が強く、一般市民に入り込む予知などほとんどない。そういった矛盾がこの書には散在しているのだが、400頁という膨大な量は、この矛盾を気づかせない効果を持っていたようだ。さらに通俗科学的な奇跡やテレパシー、血液型や体型分類学の導入は、それぞれの部分で市井の人々の興味を満たした可能性も高い¹¹。

2：二つのマビーユ像

このような書籍が世界で成功を収めた直後、マビーユの『人間の構成』は出版された。それではマビーユは具体的にカレルに対してどのように返答したのだろうか。実は、すでに引用した序章の文章以外で、マビーユがカレルの作品や思想に言及している部分はない。またカレルの作品とは異なり、『人間の構成』には文明の危機や社会問題といった問題は扱われていない。この書はむしろ純粋に科学的（異端の学問も含めた）考察を展開したものであり、生物の外観を幾何学的に抽象化し、生理学や心理学などの知識のもと、その形態の内部と外部を分析したものである。最終章（「構成の一般的原則」）では、人間と宇宙を繋ぐエネルギー論が提示されており、パーレンへの手紙の中でマビーユが語っていた「人間とコスモスの諸関係」という彼の関心に合致する内容となっている。また、大文字の名詞を多用した文体は詩のようであり、科学だけでなくオカルト、天文学、神話といった分野が入り混じる難解な書である。ラヴィーユは『新フランス評論』のエチアンブルによる批評を除けば、作品は概ね良い評価を受けたと言うが¹²、同時にあまり売れていないため、反響も少なかったとも述べている [Laville 1983 : 21]。

マビーユがカレルに対して明確な批判を表明していないためか、先行研究では解釈が分かれている。ジル・ブヌールは、マビーユとカレルを対立関係と捉え、マビーユが世界の一元的解釈を試みたことや、マビーユの作品には『人間、この未知なるもの』の最終章のような「人間の再構築」という内容がないこと自体を（批判的）返答だと述べている¹³。ブヌールはまた、当時の人々がいかに二人の作品を受容したかを示す典型的な例として、カレルの作品を高く評価すると同時にマビーユの作品を批判した雑誌『プロレタリ

ア教育者』を紹介している。カレルの作品の書評は雑誌の編集者であり、教育者であるセレスタン・フレネによって書かれ、妻で同じく教育者であるエリーズ・フレネはマビューの書評を書いている¹⁴。セレスタンはカレルの作品を「何にもまして貴重」だと称賛しており、書評には批判的な視点はほとんどない。むしろセレスタン自身も「精神病の問題は現代文明の最も不安なもので、破綻した体制の結果」だと考えており、この時代の精神病に対する、平均的な認識を窺い知ることができる（ただしセレスタン・フレネはその解決策としてソビエト連邦の社会体制に希望を求めているのだが）。唯一の批判的視点があるとするれば、フレネの自然主義的思想（naturisme）によるもので、カレルが肉体にも精神にも調和と力を与える自然の要素（食品など）を作品に取り入れていないと指摘する程度である。一方、エリーズのマビュー批評は手厳しい。彼女はマビューを独りよがりで高慢な独学者だと言ひ、内容も誤っていると批判した（「全体が根拠のない誤ったデータ」、「最悪の結論」、「生物学のありえないカリカチュア」）。この二つの対照的な書評を紹介しつつ、ブヌールはセレスタンがカレルのファシズム的要素を見逃したように、エリーズもまたマビューが何をもちてカレルに返答したかを見逃したと暗に非難した。そしてこのような態度がカレルの思想の危険性を見逃し、マビューの作品を過小評価するという当時の一般的な受容のあり方であったことを示した。

アレクサンドル・モアッティは、このようなブヌールの解釈を「アポステリオリ」なものだと評価し、「そんなことをする必要など全くないのだが」と言い添えたうえで、ブヌールがこのように解釈するのは、カレルにつきまとう負のイメージからマビューを引き剥がすためではないかと述べている¹⁵。モアッティはカレルとマビューには共謀関係も敵対関係も見ることができないが「人間改良学 anthropotechnie」という視点から両者の思想に共通点を見出し、マビューを人間改良学の「先駆者」として紹介している。補足すれば、モアッティの研究書はマビューをシュルレアリスムの一員というよりも、一人の科学者として論じている数少ない書籍である。

ブヌールの言う通り、マビューはカレルのような思想は有していない。ブヌールは言及していないが『エグレゴール』（1938）ですでにマビューはナチスやファシズムを暗に批判している。他の先行研究においても、マビューが政治的に左翼的で、人民戦線系の雑誌に寄稿したことが知られている。しかし、モアッティの指摘も正しい。『人間の構成』では、マビューは一度もカレルの批判をしておらず、両者は諸科学の統合による人間学の探究という主題を共有している。ただし、マビューが「人間改良学」という思想の先駆者であるからカレルとの共通点があるという意見には賛同しえない。本稿ではマビューとカレルを繋ぐ思想や人間関係が別にある、マビューが「人間改良学」と言った思想にむしろ反対の立場であることを見ていきたい。

3：マビユーとカレルを結ぶ二人の人物

(1) マルセル・マルティニー Marcel Martiny

『人間の構成』でもっともよく言及される学問は形態学 *morphologie* である。1937年頃からこの学問を通じてマビユーの研究活動にある人物の名が頻繁に現れる。それがマルセル・マルティニーだ¹⁶。彼はマビユーとともに1948年「形態・生理学研究学会 (Société de Morpho-Physiologie humaine)」の中心的な設立者となり、マビユーが急死した時には、それまで彼が担当していたパリ人類学学校 (école d'anthropologie de Paris) の講義を引き継いだ¹⁷。このマルティニーが学術委員を務める1937年刊行の雑誌 *Biodynamisme* の第一号 (1936年4月) には、雑誌の創刊を記念する紹介文が収録されているが、これがまさにカレルの「人間の科学」を礼讃し、カレルの研究を引き継ぐ意思を表明する内容なのである¹⁸。また、マルティニーはこの雑誌の書評欄をしばしば担当しており、第二号 (1936年6月) では『人間、この未知なるもの』について、第四号 (同年11月) では『人間の構成』に対する好意的な書評を書いている¹⁹。この書評が縁だったのかは不明であるが、書評が掲載された翌年の1937年頃から、マビユーの名が雑誌に登場し始める。確認できる限りでは、1937年から1939年までマビユーは雑誌の編集委員を担当し、論文も発表している²⁰。1940年代においてもマルティニーとカレルの繋がりを見出すことができる。マルティニーは1945年の論文集『公認の医学と異端の諸医学』に「新ヒポクラテス主義」という論文を発表しているが、この論文集の序文がカレルの論文なのである²¹。ただしマルティニーとカレルを接近させたのはこの雑誌だけではないようだ。彼らを繋ぐ人物がイタリアにいた。それが医学者のニコラ・ペンデ (Nicola Pende) である。

(2) ニコラ・ペンデと生物類型学 (biotypologie) をめぐる人間関係

フランチェスコ・カサータによれば、ペンデが創設した生物類型学は、19世紀末デ・ジョヴァンニ (A. De Giovanni) とヴィオラ (G. Viola) によって確立されたイタリア系体質医学 (médecine constitutionnelle) の流れを汲んでいる²²。ペンデは二人のもとで助手を務め、彼らの用いた形態学的分類や統計学を統合しつつ、そこに自らが本来専門としていた内分泌学 (ホルモンの機能) を導入することで、生物類型学を創始した。この学問は個人・家族・人種的な遺伝的要素をベースとし、形態や生理学的要素、感情や意思、倫理、そして知能と組み合わせるといった一種の統合的な医学といえる。このイタリア発の学問がフランスにも輸入された。フランスにおいては1932年、エドゥアール・トゥルーズのもとで生物類型学会が設立された。この学会の事務長を担当していたのが、またもマルティニーなのである。こうしてペンデとマルティニーは共通の場に名を残していく。1937

年マルティニーが学術委員の事務長を務めた第一回国際新ヒポクラテス医学学会（1937年7月1日から5日）の外国人副会長の一人としてペンデは記録されている²³。マビユーもまたマルティニーを通じてペンデと接点を持つことになる。マビユーとマルティニーが設立に関わった「形態・生理学研究学会」の雑誌にはペンデが名誉会員の一人であると記載されているのだ²⁴。さらにマルティニーの回想によれば、1950年4月、彼とマビユーが体質研究学会の第一回の会合に参加した際、マビユーの発表を聞いたペンデは類型学の国際的論文集を出版するにあたってマビユーの論文を要請したという²⁵。この論集 *Traité de médecine biotypologique* はペンデの監修、マルティニーの責任編集で1955年に出版された。ただし、マビユーが1952年に急死したことから、論集には1936年に行った講演原稿（「人間の構成」）が収録されている²⁶。

実は、ペンデは単に著名な科学者ではなかった。ペンデはイタリアファシズムとの繋がりがあり、現代においてはカレルと同じく負のイメージを持つ科学者なのだ。ペンデはファシスト党の名誉会員でかつ上院議員をしており [Cassata 2018 : 40]、また1938年の「人種主義科学者の宣言」（7月14日）の署名者の一人であった²⁷。ペンデはドイツファシストをライバルとするかのように、「地中海・アドリア海・アルプス系」の民族である自分たちを「地中海のラテン精神の統一体」と称揚するなど「ラテン文明」の擁護者でもあった [Cassata 2016 : 81]。このような状況になるともはや偶然とは考えられないほどだが、ペンデとカレルにも直接的な交流があった [Cassata 2016 : 81-82]。そもそも『人間、この未知なるもの』のなかで、カレルはペンデの類型学学院 (Institut de Biotypologie) を自分が目指す人間の復興に役立つような研究所だと評価していた [HI, 341]。そのためか1936年の夏にイタリアに旅行する機会を持ったカレルは、その際ペンデを訪問している。カレルはペンデの類型学学院が総合的な科学研究を行っていることに深く感銘を受けたようで、ニューヨークに戻ったカレルはペンデに手紙を書き、真の人間の科学に関する研究会を開催し、そこに医師だけでなく、衛生学、交通などの専門家も呼ぼうと提案するほどの熱意を見せている。補足するとこれらの学問は、カレルがのちにヴィシー政権下で実現する「人間問題研究所」で実行しようとしたプロジェクトの原案に近い。ただし、カレルとともに心臓ポンプをともに開発したりンドバグらに目の前にある研究に集中するよう諭され、この共同プロジェクトの提案は消えてしまった [Cf. Lepicard 2019 : 366-369]。

たしかにマビユーはカレルやペンデの政治的・思想的なイデオロギーは共有していなかったが、このように1930年代の医学者、とりわけ形態学や類型学を通じた人脈の中にいた。だからこそ、マビユーのカレルへの態度に二面性を見出されるのではないだろうか。1945年7月16日に親友バンジャマン・ペレに書いた手紙の内容はそれを裏付けてい

るように思われる。

人間の科学はとても大きく進歩した。占領されていた間、カレルの研究所はあらゆる種類の調査を結集して機能した。筆跡学、手相術、占星術、そして心理テスト。心理学者や精神分析医にとって、とても興味深い活動だ。芸術の面ではなくて、この方面で激しい興奮を感じている²⁸。

確認できる範囲ではあるが、カレルの研究所のプログラムには筆跡学、手相術、占星術などは書かれておらず²⁹、マビーユがどこからこの情報を得たのかわからない。もしかしたら、この話はマルティニーから聞いたのかもしれない。手紙と同年に出版された論集『公認の医学と異端の諸医学』はホメオパシー、鍼術、心理学から「合理的に説明できない治療」などといったテーマを扱う論考で溢れており、マビーユの話はむしろこの論集の内容に近いからだ。そのほかにも、この書簡には「左翼の人間で、ご存知のとおりフリーメーソンだった」マビーユがカレルの研究をこれほど熱心に語ったのは、フランスから5年以上も遠く離れていたためにカレルの思想の偏向を見過ごしてしまったのだろうという主旨の注が付されている³⁰。そのような解釈も成り立つが、マビーユがカレルの思想の偏りを「見過ごした」ならば、戦後『人間の構成』に大幅に手を入れて出版した『人間学入門』（1949）の序文の内容と矛盾することになる。

4：「人間の科学」という夢

『人間学入門』が『人間の構成』の改訂版であるために二つの作品が同じ内容だと判断されているからなのか、『人間学入門』が先行研究で取り上げられることは少ない。しかし、この作品の序文には、マビーユが再びカレルについて言及している箇所がある。

数年前、私はカレルの『人間、この未知なるもの』を非難しました。当時この作品は書店で大きな成功を得ました。私は作者が主張する説のファシズム的性格に漠然と気付いていました。歴史は私が正しかったことを示したのです。カレルは自分の意思で選んだのです。人間を解放するのではなく、隷属させようと望む人間たちが自由に使えるよう、自分の知識を与えることを。一般的に、私は不可知論をひけらかす作家たちを信用しません。彼らは私たちの無知がいかに大きいのかを見せつけて楽しみます。なぜなら心霊主義的、宗教的な諸目的のために、彼らは私たちの不安をいっそう増大させておいて、その不安を利用しようとするからです。そして人間を自分の弱さから保護してあげるといふ口実のもと、彼らは自分たちの教条の保護者を差し出して

くるのです³¹。

先ほど引用した友人ペレに対してマビーユが見せた興奮と、注釈者によるコメントを思い出そう。1936年の段階でカレルの理論におけるファシズム的性格に対してマビーユが警戒していたのなら、フランスから離れていたからといって、カレルの思想の危険性を忘れ、ペレに対してあれほど情熱的にカレルの研究所について語るだろうか。マビーユはカレルの思想そのものには共感もせず、警戒するところはあったとしても、研究内容や方法には関心を持っていたと考えるほうが自然ではないだろうか。それを裏付けるように、上の引用でマビーユはカレルを批判しているものの、すぐ後で「人間の科学」について、この学問がまだ不確定なものであるため、不可知論者の欺瞞がある。だからといって、見えるものだけを現実だと限定する合理主義者の態度を認めるべきではないと暗に擁護している [ICH, 18]。マビーユが糾弾するのは、カレルをはじめとする読者の無知を利用し、不安を煽り、彼らを守るといいながら、自分たちの思想を利用する「作家たち」であり、マビーユが問題視したのは、不可知論という口実のもと、不可知を可知にすべく努力をしない知的怠惰さや、為政者に科学知識を利用させてしまった科学者の倫理観なのである。マビーユは「思うに、人間の科学は、新たな文明のかなめとなるだろう。この科学は学者が人間を信頼し、人間に奉仕することを要求する。これは人類の運命に関わることなのだ」と述べている [ICH, 19]。戦後に改訂した『人間学入門』の序文において、戦争を通じて科学がいかに人類にとって危険なものになりうるかを反省し、科学者とはどうあるべきか自戒を込めて発言する必要をマビーユは感じていたのだ。ただし、マビーユはあくまでもカレルとは違うやり方で、真の「人間の科学」を探究し続けようとしたようだ。

人間の科学は人類学 *anthropologie* という名を持つべきだろう。不幸にもこの語の意味は慣用的に制限されている。この語は人体の計測、特に頭蓋骨の計測を喚起するが、それが問題ではない。人間は生きている統一体なのだから、人類学は諸科学の科学、あるいはそれらの統合でなければならない。それは人間の類型の多様性を知ること、遺伝学、医学の様々な分野、心理学、社会学、そして歴史の多様な諸科目すべてが出会う点なのだ。 [ICH, 20]

思想の違いを考慮しなければ、マビーユもカレルも学問の統合による「人間の科学」を探究していた。ただし、マビーユは「人間の類型の多様性を知ること」が重要だと述べている。実際、彼は現代の人類学には「古典的生理人類学 *anthropologie physique classique*」と「生物類型学 *biotypologie*」という二つの流派があるとし、それらの危険性を指摘してい

る [Cf. ICH, 20-21]。マビエユによれば、前者は人種の特徴に関心を持ち、遺伝や混血のメカニズムを用いて「優秀な人種と劣った人種という概念」を生み出した。後者は共同体の内部に存在する多様な類型を分類・定義し、類型の違いを決定する要因を環境（社会・食物・気候など）に求める学問であり、本来は人間固有の生物学的意味を見出し、より健康で幸福な社会を目指す学問であるが、類型の価値を恣意的に判断すれば、カーストに分割された社会階層制を生み出すリスクを生じさせる。

このようにマビエユは二つの先行する学問にはいずれも差別思想へと繋がるリスクがあると考えた。しかし彼はこれらの学問を完全に否定していない。作品の最後に「私は真の生物類型学の構成を正当化するような論理的土台を打ち立てようと試みた」 [ICH, 201] と述べていることから、彼がこれらの学問の失敗を乗り越えることを目指したことがわかる。実際、マビエユは形態の多様性を研究することの重要性を認めている。ただし、彼は、これらについて研究を進めると、いずれは「人間の原型 prototype」が存在するかどうかという問題にたどり着くと考える [ICH, 21]。彼の目指す「人間の科学」は先行する学問とどこが違うのか。マビエユは比喻を用いつつ、彼が提示しようとしたのは「平均的、あるいは完璧な類型のデッサン」ではなく、「機械の基本的構造を表すような組み立て図 schéma de montage」だと説明している [ICH, 21]。先行する学問は「類型」という概念を生み出し、それを基準や理想とすることで、人間の優劣という考えに導いてしまった。マビエユの目指す学問はむしろ逆の発想に基づいている。人間の多様性を理解するという目的のために、あらゆる人間に共通する原初的な構造を見出そうとするのだ。

結論にかえて：「人間の科学」から「全体論的人間学」へ

ブヌールが指摘したように、マビエユはカレルの優生学的思想など共有していなかった。しかし、モアッティのいうように、彼らの関係は敵対的・共謀的といった単純な図式に還元することもできない。そしてマビエユはモアッティの考えるような、カレルと共通する「人間改良学」の先駆者でもないこともわかった。マビエユには人間の優劣の基準といった考えそのものを拒否しているからだ。

わかったことは、マビエユとカレルが「人間の科学」という共通の出発点から各々の研究を始めたこと、また、その手段として両者とも諸科学の統合の必要性を感じていたことだ。実際、マビエユは子どもの時から「人間の科学」に関心を持っていたという。マビエユの二人目の妻ジャンヌによれば、彼が14歳の頃、夢を見て翌朝父親に「僕は人間の科学 science de l'homme をやりたい」と宣言して驚かせたそうだ [Laville 1983 : 4]。この打ち明け話がマビエユによる自己神話化でなければ、この時点で彼が人生をかけて「人間の科学」に取り組むことが予告されていたのかもしれない。『人間の構成』の序文で、マ

ビーユがカレルの本の出版以前に執筆を終えていたことを強調したり、この作品が「何年もの研究内容を要約したもの」（下線は引用者）であるとわざわざ書いたのは、カレルの理論を批判するためでも、人気に便乗するためでもなく、「人間の科学」は自分独自の研究課題だと主張するためだったのかもしれない。

とはいえ、『人間の構成』にマビーユは満足していなかった。『エグレゴール』（1938）の序文において、彼は『人間の構成』が不十分であったことを告白し、それを補うために『エグレゴール』では三つの分野（自然のメカニズム、社会、個人）における「社会構造の問題」を扱ったと説明している³²。「社会」や「個人」という主題は、カレルの作品にあって『人間の構成』にはないものだ。同じ序文のなかで、マビーユは近々鉱物や生物の形態に関する『一般形態学論』という書籍を出版することも予告している。1936年版の『エグレゴール』を確認すると、挿入された「同著者の作品一覧」の近日出版予定欄には『一般形態学論』と『人間のリズム』という書名が記されている。これらの作品が実際に出版されることはなかった。その代わりなのか、『人間学入門』には『人間の構成』では扱うことがなかった、人間の時間感覚について論じられている箇所がある。そこでマビーユはカレルとルコント・ドゥ・ヌイイの研究を紹介しているのだが [ICH, 84-85]、これは『人間、この未知なるもの』のなかで、カレルがルコント・ドゥ・ヌイイの研究を紹介している部分と呼応している [HC, 217]。『エグレゴール』の一年前に出版された『リジューのテレーズ』（1937）もカレルとの関連を喚起する作品である。この作品は「奇跡」の女性である聖テレーズを医学的・社会学的観点から分析し、聖性と解釈されている彼女が現代の病に苦しんでいたことを暴き出すものである。これは「ルルドの奇跡」を信じたカレルに対するマビーユの返答、あるいは挑戦であるとも考えられる³³。マビーユがカレルの作品を知る前に「人間の科学」の必要性を感じ、独自の研究を進めていたとしても、カレルの著作からさらに探求すべき主題や不十分な点について着想を得たとも考えられる。いずれにせよ 1936年の『人間の構成』は彼の壮大な人間論の開始を予告したに過ぎなかった。

しかし「人間の科学」への探求心だけが両者を接近させたのだろうか。もう一つ重要な要素があると思われる。それは 1920年代から 30年代にかけてフランスでリバイバルした医学ホーリズム（holisme médical）である³⁴。ローレンスとヴァイスによれば、この学問は科学の発展によって還元主義的になり、技術に過度に依存しすぎた当時の主流の医学に対する反抗として生まれた。医学ホーリズムは、体質医学、心身医学、新ヒポクラテス医学、新体液説、社会医学、カトリック的ヒューマニズム、ヨーロッパにおいてはオルタナティブな癒しとしてホメオパシーや自然療法など様々な形態を含んでおり、国によっても様相は異なる³⁵。特に大戦間期のフランスにおける医学ホーリズムについて、ヴァイス

は1960年代まで「ホーリズム」という語が一般には普及していなかったとし、その代わりに使われた標語の例として「統合 *synthèse*」「医学ヒューマニズム *humanisme médical*」「新ヒポクラテス主義 *néo-hippocratism*」を挙げている。これらの用語は本稿で紹介したカレルやペンデ、マルティニー、そしてマビーユの用いる語に呼応する。そもそもヴァイスの論文ではカレルとマルティニーはホーリズム医学者として扱われており、本稿ですでに取り上げた『公認の医学と異端の諸医学』もまた、ホーリズム医学者の論集として紹介されている³⁶。マビーユも実は1936年にホメオパシーに関する論文を出している [Laville 1983 : 104]。他方、ヴァイスは基本的にホーリズムの医学者には左翼思想を持ったものが少ないとし、唯一知り得る左翼ホーリズムの例としてアルマン・ヴァンサンの『人間の医学へ *Vers une médecine humaine*』という本を挙げている [Weisz : 82, n. 79]。驚くことに、マビーユが人民戦線系新聞 *La Flèche* に好意的な書評を寄せたのは、このヴァンサンの書についてであった³⁷。1930年代半ばにマビーユをとりまくあらゆる状況が、このホーリズム医学と結びついているのだ。

マビーユを1920-30年代のホーリズム医学という「異端の医学者」の一人として位置づけることで、彼の作品を先行研究とは異なる視点で分析することができるのではないか。もしそうであれば、彼の思想の特徴として挙げられる「一元論的」という表現すら見直す対象となる。各々の部分の総体よりも全体が大きいとするホーリズム（全体論）という語の本来の意味を考えれば、先行研究が必ずといってよいほど言及するマビーユ思想における「世界の一元論的解釈」についても新たな解釈を与えることができるかもしれないからだ。ホーリズム思想はスピリチュアルな影響も受けていることから、マビーユの目指した人間存在を宇宙との関係の探究と親和性もある。マビーユが探求した人間と宇宙との関係だけでなく、彼の作品群そのものを一つの全体論的統一体として解釈することさえできるかもしれない。

もちろん、マビーユの思想を他のホーリズム医学や全体論的な「類型」に安易に回収することがあってはならないし、たとえ彼がこの運動に影響を受けていたとしても、彼独自のホーリズムといったものがあると考えべきだろう。シュルレアリスムの影響や、マビーユ自身の政治思想、フリーメーソンとしての活動等も考慮する必要がある。しかし、それでもホーリズム医学という異端の学問が大戦期間に一つのムーブメントとして存在していたことは、たしかにマビーユの思想の広がりや連動しており、彼の作品を分析する際につきまとう特殊な難解さを解明する鍵となりうる。今後は実際の作品分析を通じて、彼の思想とホーリズムとの関係や彼の作品群がどのように「全体論的人間学」を構成するのかを証明していきたい。

(注) * 本研究は科研費（課題番号 19K00486）の助成を受けている。

* 本稿に登場する科学者の名前についてはアルファベット表記を付す。

- 1 Jacqueline Chénieux-Gendron, *Le surréalisme*, PUF, 1984, p. 104. (星埜守之、鈴木雅雄訳『シュルレアリスム』、人文書院、1997年、p. 128).
- 2 Remy Laville, *Pierre Mabilie : Un compagnon du surréalisme*, Faculté des Lettres et Sciences humaines de l'Université de Clermont-Ferrand II, 1983. 今後この論文の引用については本文中に [Laville 1983 : 頁数] で表す。
- 3 鈴木雅雄「聖女にバラの花束を——ピエール・マビーユ試論——」、『早稲田フランス語フランス文学論集』、第5号、1998年、pp. 175-187.
- 4 アレクサンドリアンは、シュルレアリスムの仲間であり医師としてのマビーユの挿話を紹介している。Sarane Alexandrian, « Un médecin surréaliste », *Le surréalisme et le rêve*, Gallimard, 1974, pp. 443-455.
- 5 「(研究ノート) ピエール・マビーユという「掘り出し物」: ブルトンのハイチ講演をめぐって」、『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 (外国語編)』、第8号 (2)、2017年、pp. 81-90. 「眼差しの交わるどころ —— ポエムーオブジェ『行為者 A・B の肖像』(1941) をめぐる一考察」、前掲、第10号 (2)、2019年、pp. 39-60.
- 6 Pierre Mabilie, *La construction de l'homme*, Jean Flory, 1936, p. 20.
- 7 Étienne Lepicard, *L'Homme, cet inconnu (1935) Anatomie d'un succès, analyse d'un échec*, Classique Garnier, 2019, p. 18. 以降の引用は本文中に直接 [Lepicard 2019 : 頁数] と記す。ルピカールによるとアメリカでは初年度すでに10万部、1940年末までには20万部が売れ、フランスでは1939年末までに20万4600部ほどが売れた(ポッシュ版は除く) [Lepicard 2019 : 287]。フランスの販売状況について、ルピカールはドゥルアールの研究を参考にしている。Cf. Alain Drouard, *Une inconnue des sciences sociales. La fondation Alexis Carrel 1941-1945*, Éditions de la maison des sciences de l'homme, 1992. (以降 [Drouard 1992 : 頁数] と記す。)
- 8 この事件については『ルルドへの旅』(カレルの死後に出版)の邦訳者の解説も参照した。アレクシー・カレル『ルルドへの旅 ノーベル賞受賞医が見た「奇跡の泉」』、田隅恒生訳、中公文庫、2015年。
- 9 Alexis Carrel, *L'Homme, cet inconnu (1935)*, Plon, 1968. (以降 [HC, 頁数] と記載)。日本語に訳す際には英語からの邦訳も参考にした(『人間、この未知なるもの』、渡部昇一訳、三笠書房、1992年)。
- 10 アンドレ・ピショーは、カレルがペタン元帥支持論者であったことから、カレルを当時の思想の牽引役のように扱う研究もあるが、カレルの発言は当時の常套句であり、

- 同じ考えを共有する生物学者や医師も少なくなかったと指摘し、「1935年において、ヒューマニズムは今日のそれとただ単純に同じではないのだ」と述べている。André Pichaud, *La société pure. De Darwin à Hitler*, Flammarion, « Champs essais », 2017, pp. 8-10. 他方、アンヌ・キャロルの研究はフランスにおける優生学の歴史にカレルを冷静に位置付ける試みである。Anne Carol, *Histoire de l'eugénisme en France. Les médecins et la procréation XIX^e-XX^e siècle*, Éditions du Seuil, 1995.
- 11 当時すでにシュルレアリスムからは離れ始めていたが、ロジェ・カイヨワがカレルに対して鋭い批判をしたことは補足しておきたい。『新フランス評論』の編集長であったジャン・ポーランが書簡（1935年12月6日）にてカイヨワに書評を依頼した。しかし、カイヨワの批評があまりに厳しいと思ったのか、ポーランは再びカイヨワに手紙を書き（1936年1月15日）、「私はあなたが正しいと確信していますが、この書籍にまつわる評判（しかも好意的な）から考えて、もう少し多くの証拠をもって、あなたが正しいことを証明してほしいのです。[...] 反論をもう少し発展させて、正確にしてくれませんか」と書き直しを依頼している（*Cahiers Jean Paulhan*, n°6, « Correspondance Jean Paulhan-Roger Caillois 1934-1967 », Gallimard, 1991, p. 31）。最終的に掲載された書評はそれでも厳しいものであった。カイヨワはカレルの知識の浅はかさを批判したうえで、「この本において、ある者は生物学を見出し、またある者が政治的プロパガンダの源泉を見出したということは、この本の価値に賛同するいかなるものも証明しないし、またこの書籍の価値に対抗するいかなるものも証明しない。というのは、[生物学に関する] 無能に熱狂することも、[政治的プロパガンダに関する] 関心に熱狂することも受け入れられないからだ」と作品を拒否する態度を明確にしている（下線は引用者）。Roger Caillois, « L'Homme, cet inconnu, par Alexis Carrel », *La Nouvelle revue française*, mars 1936, pp. 438-439.
- 12 エティアンブルはマビーユが身体を円筒状のコイルや手足をシリンダーに置き換えたことに「言い過ぎ、あるいは言い足りない」と苦言を呈している。Etiemble, « La construction de l'homme par le Dr. Pierre Mabile », *La Nouvelle revue française*, août 1936, p. 400.
- 13 Cf. Gilles Bounoure, « Pierre Mabile et le merveilleux (médecin, marxisme, surréalisme) », *Contretemps*, 2012, pp. 141-151.
- 14 ブヌールは雑誌名しか明示していないが、カレルの書評は1935年12月（第6号）に、マビーユに関する書評は1936年11月（第3号）に掲載されている。Cf. *L'Éducateur prolétarien*, n°6, décembre 1935, pp. 140-141 et n°3, 1^{er} novembre 1936, pp. 74-75. ドルアールもこの雑誌について言及はしているが、フレネの名前は出して

- いない [Drouard 1992 : 119]。
- 15 Alexandre Moatti, *Aux racines du surréalisme. France 1930-1980.*, Odile Jacob, 2020, p. 145, n. 37. モアッティ自身も述べているように、マビーユは人間改良学という語を使用したことがない (*Ibid.*, p. 146)。
- 16 かなり簡潔ではあるがマルティニーに関する紹介文がある。Denise Ferembach, « Le Docteur Marcel Martiny (1897-1982) », *Bulletins et Mémoires de la Société d'anthropologie de Paris*, Tome 10, fascicule 1, 1983. pp. 9-11.
- 17 Marcel Martiny, « L'œuvre du docteur Pierre Mabille », *Conjonction*, Institut français à Haïti, n° 42, 1952, pp. 10-21.
- 18 M. Raoul Estripeaut, « Biodynamisme », *Biodynamisme*, n° 1, avril 1936, p. 3. このテキストは第 3 号の冒頭にも掲載されている。
- 19 « L'Homme, cet inconnu. Alexis Carrel », *Biodynamisme*, n° 2, juin 1936, pp. 39-41. « La construction de l'homme par le Dr. Pierre Mabille », *Biodynamisme*, n° 4, novembre 1936, pp. 94-95.
- 20 フランス国立図書館ではすべての号が所蔵されていない。マビーユの妻の情報では、マヴィーユはこの雑誌に 2 つの論文を書いているという ([Laville 1983 : 106 et 108])。
- 21 カレルの序文は死後の出版である。Cf. Marcel Martiny, « Nouvel Hippocratism », *Médecine officielle et médecines hérétiques*, Plon, 1945, pp. 141-158. Alexis Carrel, « Le rôle futur de la médecine », *op.cit.*, pp. 1-9.
- 22 ペンデヤや生物類型学に関しては、カサータによる二つの論文を参考にした。Francesco Cassata, « Construire l'“homme nouveau” : le fascisme et l'eugénisme “latine” », *Revue d'Histoire de la Shoah*, n° 204, janvier 2016, pp. 63-83 (以降 [Cassata 2016 : 頁数] とする) ; “Biotypology and Eugenics in Fascist Italy”, *The “New Man” in Radical Right Ideology and Practice, 1919-1945*, Bloombury Academic, 2018, pp. 39-63 (以降 [Cassata 2018 : 頁数] とする) .
- 23 *1^{er} congrès international de médecine néo-hippocratique. Les Actes.*, Congrès international de médecine néo-hippocratique, 1937.
- 24 *Revue de morpho-physiologie humaine*, Société de morpho-physiologie humaine, n° 1 - n° 17, L. Jeanrot, 1948-1953.
- 25 Martiny, *op.cit.*, p. 13. ラヴィーユもこの出来事について言及している ([Laville 1983 : 71]) .
- 26 *Traité de médecine biotypologique*, G. Doin & C^{ie}, 1955.

- 27 この「宣言」については次の論文を参考にした。高橋進「(研究ノート) イタリア・ファシズムと反ユダヤ主義・人種主義(1) ——グローバル化時代の新しいレイシズムの分析のために——」、『龍谷法学』、龍谷大学法学会、44巻4号、2012年、pp. 661-689.
- 28 Pierre Mabile, « Sept lettres et une carte postale à Benjamin Peret », *Pleine Marge*, n° 31, 2000, pp. 86-87.
- 29 Cf. *Cahiers de la Fondation française pour l'étude des problèmes humains*, n° 1-4, 1943-1945. 遺伝学、心理学、統計、生物類型学といった科学を用いて、人口、子どもや妊娠中の女性の栄養、農業、労働といった主題に取り組んでいたようだ。
- 30 *Ibid.*
- 31 Pierre Mabile, *Initiation à la connaissance de l'homme*, PUF, 1949, pp. 17-18 (以降 [ICH, 頁数] と本文中に記載) .
- 32 Pierre Mabile, *Égrégore ou la vie des civilisations*, Jean Flory, 1938, pp. 11-16.
- 33 ブヌールもこの作品はカレルが擁護した神秘的「奇跡」に対する医学的論証だと指摘している。Cf. Gilles Bounoure, *op.cit.*, p. 145.
- 34 日本において実践されている「ホリスティック医学」という語もあるが、異なる点も多いので、フランス語 *holisme médical* や英語 *medical holism* を参考に「医学ホーリズム」と訳した。
- 35 Christopher Lawrence and George Weisz, « Medical Holism : The Context », *Greater than the parts : Holism in biomedicine, 1920-1950*, ed. by Christopher Lawrence, George Weisz, Oxford university press, 1998, p. 1.
- 36 George Weisz, « A Moment of Synthesis : Medical Holism in France between the Wars », *op.cit.*, p. 84. (以降、[Weisz : 頁数] とする)。
- 37 Pierre Mabile, « Vers une médecine humaine », *La Flèche de Paris*, le 30 avril 1937, n° 64, p. 3. ヴァイスだけでなく、マビーユも指摘しているが、作者は左翼系カトリック雑誌『エスプリ』の関係者である。